

総論

大学の役割と就職活動

もりた ひろあき
森田 弘昭

日本大学
生産工学部土木工学科教授

1 はじめに

社会が期待する大学の主な役割は、研究と教育と人材供給ではないかと考えられているが、この三つの役割の軽重は、国によっても時代によっても大学教員、学生、父兄など大学関係者によっても異なり、どの役割に重点を置くかは明確な答えのないテーマである。全国には788校¹⁾の大学があり、土木工学科を設置している大学は日本大学を含むわずか13校²⁾であるが、土木工学そのものは、建設工学科や環境創造工学科などの学科を有する102校の大学で学ぶことができる。読者の皆様

には、本稿が私立大学土木工学科教員の限られた経験に基づく内容であることを前提に読み進めて頂きたい。

2 大学の4年間

本学科の4年間の学修の流れを図-1に示す。

[1年生]

どの専門分野でも必要な英語や微分・積分などの基礎知識を学ぶとともに大学における学修のスタイルを学ぶ全学共通教育科目の履修が始まる。またサークル活動(62サークル)やアルバイトへの参加が始まる。各サーク

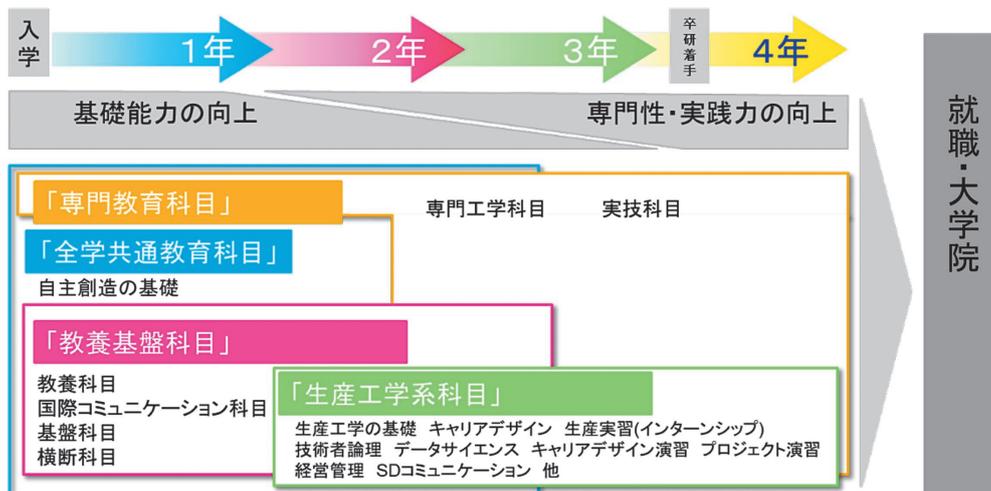


図-1 学修の流れ



写真-1 サークルの新入生勧誘活動



写真-3 卒業研究におけるディスカッション



写真-2 ベトナムでの生産実習@日系コンサルタント

ルによる新入生の勧誘状況を写真-1に示す。Withコロナが定着して蘇った大学における春の風物詩である。
[2年生]

社会人基礎力を身につけるキャリアデザインに代表される生産工学系科目の履修が始まる。
[3年生]

専門分野に関する実験や実習を通じて実務能力や応用力を身につける。また、企業や役所において4週間の実務経験（夏季）を積む生産実習が必修科目として設定されている。コロナ禍以前は、海外での生産実習（写真-2）も行われていた。

[4年生]

講義科目はほぼ終了し卒業研究を通じて3年間に習得した

学問を深化させるとともに説明能力や考え抜く力を向上させる。写真-3に令和3年度の防災研究班のディスカッションの状況を示す。

3 就職の現状

表-1に過去3年間の業種別の就職状況を示す。社会情勢によって変動はあるものの概ね半数が建設業、コンサルタントと公務員がそれぞれ15%ぐらいで残り20%ぐらいが公共性の高い民間企業などに就職している。表-2は、2017年から2021年3月までに卒業した学生の主な就職先である。本学科は、就職希望学生の100%が就職できる超売り手市場となっている。

表-1 過去3年間の就職先

業 種	平成 30 年度		令和元年度		令和 2 年度	
	就職者数	割合	就職者数	割合	就職者数	割合
建設業	100(7)	51.3%	85(4)	47.0%	109(4)	58.3%
建設コンサルタント業	28(0)	14.4%	24(3)	13.2%	41(10)	21.9%
公共性の高い民間企業 (JR、NEXCO等)	11(2)	5.6%	13(1)	7.2%	12(3)	6.4%
製造業	3(0)	1.5%	7(1)	3.9%	1(0)	0.5%
不動産業	4(0)	2.1%	1(0)	0.5%	0(0)	0%
公務員	33(3)	16.9%	34(3)	18.8%	13(0)	7.0%
進学	6(0)	3.1%	10(0)	5.5%	8(0)	4.3%
その他	10(2)	5.1%	7(0)	3.9%	3(0)	1.6%
卒業生数	199(12)		185(14)		189(18)	
就職者数	195(12)		181(13)		187(17)	
就職希望者数 ^{注4)}	195(12)		181(13)		187(17)	
就職率 ^{注5)}	-	100%	-	100%	-	100%

注1) 令和3年3月31日現在

注2) ()内の数字は女子学生数であり総数に含む。

注3) 割合は就職希望者数に対する割合である。

注4) 就職希望者数とは、卒業生の内、就職を希望した学生数である。

注5) 就職率とは、 $100 \times (\text{就職者数}) / (\text{就職希望者数})$ である。